モノと情報班　コメント寄稿

Diffusion をめぐって
－人類学と歴史について若干の補足－

山田　仁史（国立民族学博物館・外来研究員）

1990 年代以後、人類学とその隣接諸科学においては、構造主義の衰退とちょうど呼応するように、《歴史への回帰》という傾向が見られる。それはたとえば、考古学においてである。

この現象をカリフォルニア大学の人類学者の Patrick Vinton Kirch とニュージーランドのオークランド大学の人類学者である Roger Green は、homology と analogy という言葉で説明している [Kirch & Green 2001]。たとえば二つの遺物が類似している時、ホモロジーとは、同じ系統にあるために似ているという説明原理である。それに対しアナロジーというのは、単に偶然類似しているというだけの場合をさす。

Kirch らによれば、1960 年代から 70 年代、つまり構造主義の台頭と同じころ、少なくとも北米の考古学界では、ホモロジーという説明原理は価値が下がり、アナロジーという説明に取って代わられた。ここで盛んになっていたのは、ニュー・アーケオロジーないしはプロセス考古学と呼ばれる潮流で、移動（migration）という説明原理を拒否し、土着の文化発展というのを重視する立場を取っていた。つまり、人が移動するのに伴ってモノが運ばれる、という可能性を非常に軽視していた。

この「移動」に再び注目を向けた、いわば流れを変えた論文は、1990 年に発表されたアメリカの考古学者 David Anthony の論文で、「考古学における移動：赤子と産湯」という面白いタイトルがつけられていた。そこで彼は、ここ二十年の間、つまり 1970 年代から 80 年代にかけて、考古学者は「移動」という説明原理を不当に軽視してきた。これは産湯とともに赤子まで流すような行為である、と言って、紀元前四千年紀の東欧をモデル・ケースとしてヒトとモノの移動の動態を描いてみせた [Anthony 1990]。

これに刺激を受けた考古学者、たとえばハンブルク大学の Stefan Burmeister は、ヨーロッパからアメリカに移住した移民たちの家屋を研究し、外側から見ると同じような家でも、内部の家具などにはもともと住んでいた所の特徴が残る、といったことを指摘した [Burmeister 2000]。

こういう 90 年代以降の考古学界の変化は、一種の歴史への回帰ではないかと私は思う。歴史に関心を持たない考古学などあり得ない、という向きもあるかもしれないが、長いタイムスパンでの歴史に本当に目を向けるならば、移動とか伝播といった説明原理は避けて通れない。それを意識的に避けてきたのは、やはり歴史から逃げてきたことになるのではないか、と思われる。

ついでながら日本について見ると、やはり同じような歴史への回帰が見られるように思う。

筑波大学にいる考古学者の Mark Hudson 氏によれば、1980 年代の後半までは、縄文人が発展して弥生人になったという、土着の文化発展を重視する見方の方が有力で、縄文人と弥生人の出会いを異なるエスニック・グループ同士のインタラクションとして見るような人はほとんどいなかった。ところが、この流れを変えたのは、やはり 1991 年に書かれた形質人類学者・埴原和郎氏の、日本人の二重構造モデルについての論文だった。

これは、もともと日本列島に縄文人が住んでいたところに大陸から弥生系の移住者たちが入ってきて、その混合によって、いわば重なり合って二重の構造ができて、今の本州人になり、他方ではアイヌや琉球の住民の間には、縄文人の形質的特徴が比較的強く残っている、という内容の論文。埴原氏が縄文人を南方型モンゴロイドと考えた点はその後修正されつつあるようだが、このモデルは大筋では認められている [Hudson 1999; Hanihara 1991]。

このように、日本の先史に関しても、「移住」への関心というのが 90 年代になって再び高まってきているように見える。

伝播（diffusion）という現象に焦点をしぼるなら、イノベーションの伝播に関する Rogers の古典的研究 [1995] のほか、分子人類学者の Cavalli-Sforza らが提出している “cultural transmission”（文化の伝達）という概念 [Cavalli-Sforza & Feldman 1981] もまた、伝播についての新たな理論的研究として注目される。

言語学においては、ハワイ大学の Robert Blust が 1999 年に発表した「狐の嫁入り」という論文の中で、天気

雨のことを「狐の嫁入り」とか、あるいはそれに類する肉食動物の結婚式・性交・誕生などと表現する地域がユーラシア大陸からアフラカにかけて広く見られることに注目し、その説明原理として、次のような三つを挙げている。

A. convergence（帰一、輻輳）または independent invention（独立発明）

B. diffusion（伝播）

C. common inheritance（共通の遺産）

そして、文化要素の分布と、それについての説明のされ方について、次のような表を出している。（Natural は、世界の他の地域にも見られる、という意味）

Type	Linguistically Related	Continuous	Natural	Explanation
1	+	+	+	C, A/B
2	-	+	+	A/B
3	+	+	-	B/C
4	-	+	-	B
5	+	-	+	A/C
6	-	-	+	A
7	+	-	-	C
8	-	-	-	nonoccurring

つまり、言語的に関係がある場合には共通の遺産という可能性が必ず現れ、連続的分布を示す場合には必ず伝播の可能性があり、ナチュラルな、すなわち世界の他の地域にも現れる場合には帰一または独立発明という可能性が必ずある、ということである [Blust 1999]。

ちょっと図式的すぎる難点はあるが、伝播の可能性ということを積極的にかつ論理的に示したことは評価できる。

よく出される批判の一つに、人間集団の移動と、神話も含めた文化の伝播がどの程度重なるのか証明できないではないか、という問題がある。これは、もっともな批判。たとえば、かつてドイツの Gustav Kossinna は先史遺物から確認される文化領域を民族領域として解釈した。また Heine-Geldern はオーストロネシア語族の移動について書いた時に、三種類の形の異なる石斧を、三つの言語集団と結びつけた。つまり、円筒石斧とパプア諸語、有肩石斧とオーストロアジア語族、方角石斧とオーストロネシア語族という具合である。

しかし、現在の考古学は遺物を人間集団に結びつけることには慎重になっている。同様に、神話などの文化要素も人間集団と結びつく場合とそうでない場合がある。ただ、この問題には、どんな場合でも説明できるような万能のモデルとか法則というのは存在しない。やはり場合に応じて考えていかないといけないのである。

ともあれ、こうした《歴史への回帰》という状況を踏まえて書かれたのが、先ほど触れた Kirch と Green の共著の『ハワイキ』というポリネシアの先史についての本である [2001]。この本の副題は「歴史人類学の試み」となっていて、人類学における歴史、それもフランスの社会史学派のようなのではなく、もっとタイムスパンの長い歴史、longue dur 仔の歴史を扱おうという、一つのマニフェスト、宣言になっている。著者たちは「歴史人類学」ではなくて「新・文化史」（New Culture History）にしようか迷った、と前書きに書いているほどだ。

この本で試みられているのは、人類学の三つの分野の知識を総動員してポリネシアの過去を復原したらどうなるか、ということである。その三分野とは、一つは考古学、もう一つは歴史的言語学だが、面白いことに、三番目に入っているのは比較民族誌、つまり民族誌の記述の比較である。この民族誌の記述という中には、神話なども入ってくる。

たとえばカーチは別の本 [Kirch 2000: 97 ミ 98] の中で、ラピタ文化、つまりポリネシア人の直接の祖先となったと見られる、特殊な土器を持つ紀元前 1500 年ころにメラネシアに現れた文化の担い手について、その社会

構造を考えている。原オセアニア語の語彙の復原によると、この人々は恐らくキョウダイの長幼の序にとても重きを置いていたらしい。

そしてしばしば長子に財産とか知識が渡される。そうすると、年下の弟は仕方がないので出て行って、別の島に新たな居住地を作る。これがポリネシアの植民において大きい役割を果たしたのではないか、ということを考える。そういう目で見ると、ポリネシアの神話には兄弟の争いというのがよく出てくる。これはそういう社会構造が背景にあるのではないか、とそういうことを言っている。これなど、海幸と山幸の争いなどを考える時にも参考になるのではないかと思う。

このように、90 年代に人類学と隣接諸科学で始まった、学際的な、つまりさまざまな学問分野を横断する形での歴史への回帰という動きの中で、神話から解き明かされる、あるいはヒントを与えられるような問題というのは少なくないのではないか。

この学際性という流れの他に、国際性というのも 90 年代以降の人類学の一つの特徴になっている。

ノルウェーのオスロ大学の人類学者 Thomas Eriksen とデンマークのコペンハーゲン大学の Finn Nielsen [Eriksen & Nielsen 2001] が指摘するのは、この背景にはやはりソ連の崩壊がある、ということである。これによって、旧ソ連・東欧の学者たちと西側の学者たちの交流が前よりも盛んになり、ロシアでどんなことが研究されているか、ということも一層広く知られるようになった。

たとえば、エリクセンらは挙げていないが、大語族の研究もそうしたうちの一つだ。大語族というのは、これまでの伝統的な分類におけるインド＝ヨーロッパ語族であるとかオーストロネシア語族のような語族同士のうち系統関係があるのではないかと考えられる者同士をくくった、より大きいまとまりである。

そういうものとしては、ノストラティックが有名である。これは旧ソ連で研究が進められていた大語族の一つで、アフロアジア、インドヨーロッパ、ドラヴィダ、ウラル＝ユカギール、アルタイといった、ユーラシア大陸のかなりの語族をリンクしてしまう。

以上のように、1990 年代以来の人類学における長いタイム・スパン [longue durée] の歴史研究は、分子人類学や社会学・メディア論からの影響を受けてなされるか、それとも、20 世紀における歴史言語学の発展をふまえて、言語のまとまりに重点を置く傾向がみられる。こうした研究方法に加えて、田口氏の言及されている、語族横断的な文化要素の分布にも注目する文化クラスターのような研究もまた必要ではないかと思われる。

引用文献

Anthony, David W. 1990. Migration in Archaeology: The Baby and the Bathwater. American Anthropologist, 92: 895-914.

Blust, Robert. 1999. The Fox's Wedding. Anthropos, 94: 487-499.

Burmeister, Stefan. 2000. Archaeology and Migration: Approaches to an Archaeological Proof of Migration. Current Anthropology, 41(4): 539-567.

Cavalli-Sforza, L. L. & M. W. Feldman. 1981. Cultural Transmission and Evolution: A Quantitative Approach. (Monographs in Population Biology; 16). Princeton: Princeton University Press.

Eriksen, Thomas Hylland & Finn Sivert Nielsen. 2001. A History of Anthropology. London: Pluto Press.

Hanihara, Kazuro. 1991. Dual Structure Model for the Population History of the Japanese. Japan Review, 2: 1-33.

Hudson, Mark J. 1999. Ruins of Identity: Ethnogenesis in the Japanese Islands. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Kirch, Patrick Vinton. 2000. On the Road of the Winds: An Archaeological History of the Pacific Islands before European Contact. Berkeley: University of California Press.

Kirch, Patrick Vinton & Roger C. Green. 2001. Hawaiki, Ancestral Polynesia: An Essay in Historical Anthropology. Cambridge: Cambridge University Press.

Rogers, Everett M. 1995. Diffusion of Innovations, 4th ed. New York: The Free Press.